

ど異なるところなき程度に化成されたものであつて、文化の關係から見れば、實は漢人の支配と大して相違はなかつたのである。しかるに長い間に互るかゝる史上の常例を破つて、漢土の一部を領土とし、自からその統治に任ずる先蹤を爲したのが契丹種族の遼である。内外蒙古から滿洲に互る領土の外に、漢土燕・薊の十六州を後晉から收め、たとへ漢人の知識を採用したにしても自から特種の制度を施いてこれを統治し、文字の製作を始として、独自の契丹文化を發達せしめた。これを從來の有様と比較して考へると、彼等はこゝに民族としての存立の自覺を生じたもので漢文化に化成せずして漢人を治する獨立的立場を創造したものと見なければならぬ。この勢に追隨したものが黨項族の西夏であり、女眞族の金である。西夏は河西地方の小地域に蟠居して、左程大勢力には達しなかつたが、金は遼を倒してその領土を奪つた上に、更に宋を南に驅逐して淮水以北を領有し、中原の地は滿蒙と共にその支配の下に置かれることになつた。そうして金もまた遼以上にその民族独自の文化の發展保存に力を用ひ、漢文化の外に立つて漢人を支配することに努力した。たとへその努力にも係らず、彼等の漢文化に同化せられる勢は滔々として防ぐ可らざるものがあつたにせよ、彼等がその國勢の發展と文化の獨立とに意を用ひたのは、前の契丹族の遼と同じく、漢土を支配しながら深く民族的自覺を有してゐたものであることを認めなければならぬ。

宋の文治主義と北族の侵入

さて武人跋扈の宿弊を除くことに専念した宋の太祖が逸早く節度使を廢し、兵制を改革したのは、誠に當を得た處置と思はれるが、一利一害は數の免れぬところで、これが爲に武備が薄弱となり、北族の侵入を容易ならしめた